

第2節 上下分離成形人物埴輪について

本古墳から出土した人物埴輪には、上下分離成形の埴輪が含まれていた。今までに茨城県を中心に出土しているが数は多くなく、本古墳がその追加例となるので既出例を含めて報告する。

上下分離成形人物埴輪

上半身と下半身とを別々に成形・焼成後、組み合わせて1体にする人物埴輪で、円筒台から立ち上げた両脚を腰で急激にすばめて上端を細い筒状に仕立てた下半身に、腰から下の着衣（挂甲）をロート状に広げた上半身をかぶせて組み合わせるものである。大型の全身立像を上下別々に造ることで、重量による成形の困難を緩和し、小型の窯での焼成を可能にしたうえ、運搬においても破損の危惧を減らすという利点があったと考えられる。知られているもののほとんどは武人埴輪である。

荷鞍坂1号墳の人物埴輪

本古墳で見つかった人物埴輪の種類には女子・（武人ではない）男子・武人があるが、多くは破片で全体を復元できるものはない。女子埴輪（第19・20図）は、頭部が2個体あるほか、別個体の髪の破片が2点あるので4体以上はありそうである。髪は長方形で、長辺の中ほどに粘土紐を渡して髪を結えた状態を表現している。頭頂部をふさぐように髪を貼りつけるが、頭に甕を載せたものについてはそれを避けて後頭部に貼りつけている。

武人ではない男子の後頭部の破片（第18図-22）には、短い鍔のある帽子のような被り物が残っている。後頭部中央で左右に振り分けた髪を表現した右側後頭部の破片で、被り物にはV字の一部のようなヘラ描きがある。ほかにはベルトをしめた腰の部分の破片（第18図-26）があり、ベルトには幅いっぱいの鋸歯文を刻んでいる。また、双脚人物埴輪の裸足の足の破片（第17図-20）が1点あり、男子であろう。

武人埴輪は衝角付冑と挂甲を身につけ、左腰に大刀を佩いている。冑には線刻がなく鉢を表す粘土粒を貼りつけるもの（第15図）と、挂甲と同じ線刻を入れるが鉢表現のないもの（第17図-4）とがある。挂甲の裾と考えられる破片には脚部の剥がれ痕がないため、上下分離成形（以下分離成形）の上半身と考えられ、2個体（第15図、第17図-9）が出土している。分離成形埴輪の下半身であることを示す、上端部の細い筒状部分は3点（第18図-29～31）見つかっている。

人物埴輪の持ち物の破片（第17図）はいく種類か見つかっている。まずは右手で下端を持った棒状の部品で、途中で折損している。弦の表現はないが内側をえぐって樋を表現しているので弓であろうか。大刀は2体の武人埴輪に接合する以外にも鞘尻の破片が1点ある。大刀の護拳部である鈎金の破片および端面に木の葉形線刻がある把頭の破片があり、武人かそれ以外の男子に接合すると考えられる。

人物埴輪の形態的な特徴は分離成形であるかどうかにかかわらず、両脇に透孔をもつこと、肩から中空に腕を延ばし別づくりにした腕先をはめ込むことなどが共通している。

荷鞍坂1号墳分離成形人物埴輪の観察

分離成形の武人埴輪の上半身は2体確認できた。一方、下半身の腰の筒状部分は3体分あるので、3体目の武人の上半身が存在するか、あるいは武人ではない分離成形男子がいる可能性もある。

上半身1体目（第15・16図）は衝角付冑をかぶった頭部と、挂甲を身につけた背面側が残りの良い

第 27 表 分離成形人物埴輪出土遺跡一覧表

	遺跡名	出土地	出土遺構	文献
1	荷鞍坂 1 号墳	茨城県 水戸市	円墳 (24m)	本報告古墳
2	北屋敷 2 号墳	茨城県 水戸市	墳形不明	井上 1995
3	玉里舟塚古墳	茨城県 小見玉市	前方後円墳 (72m)	大塚・小林 1968, 1971
4	小幡北山埴輪製作遺跡	茨城県 茨城町	A 地区第 17 号窯	大塚ほか 1989
5	石崎神塚神社古墳	茨城県 茨城町		東京国立博物館 1980
6	北屋敷 2 号墳	茨城県 水戸市	墳形不明	井上 1995
7	不二内古墳	茨城県 鉢田市	前方後円墳か (65m)	八木 1897 東京国立博物館 1980
8	小幡	茨城県 行方市		東京国立博物館 1980
9	馬渡埴輪製作遺跡	茨城県 ひたちなか市	A 地区 1 号粘土採掘坑	大塚・小林 1976
10	井上コレクション	茨城県 伝東海村		高根 1990
11	鶴塚古墳	栃木県 真岡市	円墳 (楕円 22 × 18m)	小森 1987
12	神長塙平古墳	栃木県 那須烏山市	墳形不明 (残 8 × 4.5m)	五十嵐 1978
13	塙畠古墳	福島県 須賀川市	前方後円墳 (40m)	永山 1974

上半身である。頭部は頸から上がほぼ残っている。美豆良を結い、左頬と口の下に赤彩が残る。冑に線刻はなく、鉢表現と思われる粘土粒を貼りついている。頭部と組み合う胴部は、無文帶の腰部を挟んだ上下に 2 本ひと組の縦線と中ほどに横 1 線を引いてそれぞれ 2 段の挂甲小札を表している。腰から下は緩やかに広がって裾に羽状文をまわす。裾の広がりは弱く細身である。鞘尻に薄く粘土を貼った大刀が左裾近くに残っている。左右の腕には手甲を表したものらしい粘土の剥離痕がある。直接接合していないので腕の向きはわからないが、親指を広げているので何かをつかんでいるわけではない。

2 体目（第 17 図-4～9）は冑の一部、両腕、挂甲の腰から裾にかけての部分で、お互いに接点はない。挂甲の表現は 1 体目とほとんど同じだが、裾の広がりはやや広い。冑や手甲にも 2 本ひと組の縦線を刻む表現は共通している。挂甲にはわずかに大刀の剥離痕があり、接合すると思われる大刀の鞘尻表現も 1 体目と同じである。

分離成形であることを示す下半身は、3 点とも細くすぼまった筒状の上端部分だけである。他例を参考にすれば、円筒台の上部をドーム状に閉じ、その上面から両脚を立ち上げて股の高さから上は腰に向かって急激にすぼめて筒状につくった部分にあたるが、本古墳においては筒状部分と脚とが接合したものはないので高さや幅など全体の大きさは不明である。本古墳例の下半身の裾があまり広がらないことを考えると、かぶさる上着裾に合わせて細身に仕立てたのであろう。人物脚部破片は 4 点見つかっているが、分離成形人物のものと同定できるものはない。

分離成形人物埴輪の出土例（第 27 表）

分離成形の人物埴輪は茨城県を中心に 11 か所の古墳や埴輪窯址で存在が知られてきた（黒澤・平賀 2004）。茨城県では北屋敷 2 号墳（水戸市）・玉里舟塚古墳（小見玉市）・小幡北山埴輪製作遺跡 A 地区 17 号窯（茨城町）・石崎神塚神社古墳（茨城町）・不二内古墳（鉢田市）・小幡（行方市）・馬渡埴輪製作址（ひたちなか市）・井上コレクション（伝東海村）の 9 か所、栃木県では鶴塚古墳（真岡市）・神長塙平古墳（那須烏山市）¹⁾ の 2 か所、福島県では塙畠古墳（須賀川市）の 1 か所で、今回本古墳例を加え 12 遺跡となった。霞ヶ浦以北の茨城県東部地域が主な分布域で、栃木県東部の鶴塚古墳・神長塙平古墳、福島県塙畠古墳に点在している状況である。

分離成形人物埴輪の種類と特徴

分離成形人物で種類がわかるものはいずれも男子で、本古墳を含めてほとんどは甲冑を身につけた武人である。両腕を上下にずらして前に突き出す形態のものは、槍のような武器を持つ姿と推測されてい

る。ほかにも左腕を大刀に伸ばす形態がある。玉里舟塚古墳、北屋敷2号墳の大刀には護拳部の剥がれ痕があり、本古墳からも人物埴輪の大刀から剥落した鉤金の破片が見つかっているので、大刀の表現には幾種類かの形状があるようである。下半身には甲の表現がない例もある。本古墳にも双脚人物の脚と考えられる破片が何点かあるが、いずれも線刻などは施されていない。神長塙平古墳例は右脚の一部しか残っていないが水玉の赤彩があり、武人ではない男子の可能性がある。

本古墳の分離成形人物の上半身の成形技法については、腰部から裾までを倒立してつくっているという特徴があげられる。無文の腰部の下端から裾側を上にして、まるで朝顔形埴輪の口縁部をつくるように広げながら粘土紐を積み上げていったん下半部分を完成させ、天地をかえして腰部から上を頭の方向に積み上げつくっている。小幡北山埴輪製作遺跡例（大塚ほか 1989 p53, 55）や玉里舟塚古墳例²⁾でもこの方法で成形している。

分離成形人物埴輪の出土状況

分離成形人物埴輪の出土状況がわかっている例は少ない。玉里舟塚古墳は72mの前方後円墳で墳丘に円筒埴輪、西側の造出し周辺に形象埴輪を集中して樹立していた。家形・盾形・人物・馬形埴輪など多彩な形象埴輪があり、特に人物埴輪には盾持ち・分離成形武人・甲を身につけない男子・力士・女子などがあり、種類も数も豊富である。元位置をとどめるものはないが、造出しとその上段の墳丘に配置されていたと考えられている（大塚・小林 1971）。重層的に配置されたことにより、全体では平面的な広がりのある配置になっている。

北屋敷2号墳は墳形がはっきりしないものの、十数メートル規模の墳丘であって、本古墳と近い大きさの古墳である。分離成形の武人・甲を身につけていない男子・女子・馬形埴輪などが出土し、形象埴輪の構成も似ている。墳丘の北辺から円筒埴輪や形象埴輪が出土しており、現状では列状の配置にみえるが、向きや全体像ははっきりしない。

本古墳の埴輪はすべて周溝の中に破片が散らばった状態で見つかった。そのうち分離成形武人埴輪は2体とも土橋状の切れ間にもっとも近い周溝に倒れこんだ状況で出土した。人物・動物などの形象埴輪は切れ間から北側の墳丘に列をなして並んでいたと考えられるので、武人埴輪は列の先頭に立っていたことになる。

本古墳から出土の分離成形人物埴輪を概観した。12遺跡目の例となる分離成形人物埴輪は上半身2体、下半身3体が確認できたが、全体を復元するにはいたらなかった。既知の例のうち生産地としてわかつてているのは、馬渡埴輪製作址と小幡北山埴輪製作遺跡で、前者からは下半身が、後者からは上半身が出土している。本古墳例と両者との直接的な関係は見いだせなかったが、後者出土の人物埴輪の表現には共通点も見受けられた。分離成形人物埴輪を出土したほかの古墳の埴輪とも共通の表現をみることができるが、現時点では製作地の同定にいたっていない。分離成形人物埴輪については、埴輪の組成や配置、製作地と供給先など、いまだ解明されていない問題が多いが、本古墳で小型古墳における埴輪の製作技法や表現、配置状況についての一例を示すことができたのは、今後につながる手がかりになるものと思う。（賀来）

註 1) 那須烏山市の例については秋元陽光氏にご教示いただいた。

2) 明治大学博物館 忽那敬三氏のご厚意により、賀来が実見し観察した。